

個性あるレジャー

<余暇時代をデザインする>

藤竹 暁著

日経新書 223頁

280円

余暇への挑戦

21世紀には人間の平均寿命は80才となり、そうすると一生の持ち時間は約70万時間で、睡眠、食事など人間の生存に必要な時間、いわゆる生理的必需時間を1日10時間とすると、全生涯で約29万時間、人間の労働を週30時間、年実働40週、労働年令を35年とすると生涯で約4万時間働けばよいという計算になる。こうして、70万時間－<29万時間＋4万時間>＝37万時間という計算が出てくる。

つまり、人間は、4万時間の労働と37万時間の余暇の時代を迎えることになるのである。これは、フランス政府1985年グループの一員であるジャン・フーラストイエの行なっている予測であるが、わが国においても数年前から週2日の休日制度や、1週間前後の会社ぐるみの夏季休暇をとる企業がだんだん多くなってきており、われわれの1年間における休日数は着実にふえ

つつある。経済企画庁国民生活審議会の推計によっても、昭和50年代には、週46時間対54.7時間で、余暇時間が労働時間を上回るようになるとされている。このように、われわれは、より豊富な余暇時間が保障される時代の入口に立っているわけであり、いまこそ来たるべき余暇時代をいかに生きるべきかについて考えなければならないときであるというのが本書の主題である。著者は、余暇の論理は個々人が自らの手で開拓しなければならないものだということを強く主張する。「豊かな自由時間を真に充実したものにするか、それとも倦怠の連続としてしまうかは、各人がいかにして主体的な余暇の論理を作るかできるものである。さらには余暇について考えることは、必然的に人間の生活全体を考えなおすことになるのである」という基本的前提に立ちながら、いろいろな調査や実験をとおして、余暇と仕事の関係や、日本人の余暇意識の変化をとりあげている。そしてライフサイクルに応じた余暇活動の一般的条件を追求する。

しかし本書の最後の部分で「余暇はまったく新しい装いをこらして、われわれの前に立ちあらわれようとしている。そして余暇は、われわれに向って、大き

な、そしてきびしい挑戦状をつきつけようとしている。だがそれにしても、われわれはあまりにも余暇に対して無知であり無力でありすぎるのではないか。われわれは余暇について、新しい考え方を作りあげなければならぬ時期に立っているといえる」とのべられているように、すべてこれからの問題であり、われわれひとりひとりが余暇について今後強い関心を持ち、真剣に考えていきたいものである。

<根本和夫>

あとがき

70年代の選択という言葉は、単に政治面についてのみでなく、わたくしたちが余暇を考えたりその環境を考えたりする時にもあてはまる言葉だと思います。今回の特集を機に、わたくしたちをとりまくレジャーやレクリエーションとその施設、さらには労働の時間と自由時間についてあらためて問い直してみることが必要でしょう。

なお、この特集論文の1つである「遊びの構造」<田村明氏>は、かつて、「デザイン批評」<風土社刊>に掲載されたものです。こころよく転載のご承諾を下された風土社ならびにデザイン批評編集部の方々に厚く御礼申し上げます。<M>

調査季報

26

1970年6月30日

編集・発行——横浜市企画調整室

横浜市中区港町1-1

印刷——有限会社 宮村印刷所

横浜市南区永楽町2-22